

糸あやつり人形芝居

平太郎化物日記

時は江戸中期の1749年7月、

備後の国(広島県)三次の稲生家に化物騒動がもちあがる。

ひと月の間、連夜襲い来る途方もない妖怪たち。

ひとりで立ち向かったのは十六歳の平太郎であった。

その顛末は、「稲生物怪録」として世に知られ、

巖谷小波、稲垣足穂、泉鏡花、木木しげる等、

多くの作家がその話に刺激をうけて、作品を残した。

怪音が鳴り、調度品が宙を飛び、魑魅魍魎が次々出現……といった超常現象は何も欧米の専売特許ではない。我が国でも数年前、岐阜の町営住宅が同様の事態に見舞われ、ワイドショーを賑わせた。が、江戸時代の1749年7月には、その何倍も凄い、超弩級の怪奇事件が、現在の広島県三次市で起きている。稲生平太郎という若者が1ヶ月にも渡って体験したその出来事は「稲生物怪録」として世に伝えられた。奇想天外イメージのオンパレードが生々しい迫力で描写される、その特異な実録に、多くの学者や芸術家が魅せられ、そこから様々な変奏が展開した。例えば、折口信夫は戯曲「稲生物怪録」を書いた。泉鏡花は小説「草迷宮」を書き、寺山修司はそれを映画化した。児童文学の領域では、巖谷小波が傑作「平太郎化物日記」を著したが、これを糸あやつり人形芝居として上演することに挑んだのが、関西を拠点とするITOプロジェクトである。その作・演出を委嘱されたのは、少年王者館主宰の天野天街！で、この特異な演劇作家の思想形成に多大なる影響を与えた人物といえば平田篤胤と稲垣足穂なのだ。平田篤胤こそは稲生家の怪異事件を最初に研究した人物で、彼を起点として、まるで無数の糸の張り巡らされた蜘蛛の巣(web)の如き、時代を超えた稲生ネットワークが形成されて来た。その中でもとりわけ強靱な糸を引いて見せたのが稲垣足穂で、「懐かしの七月」など同題材を三度に渡って小説化し、稲生ワールドを眩いほどに輝かせた。この平田→稲垣の糸筋にぶら下がる天野なれば、当然これまでも自作品の主人公に平太郎を名乗らせるなど、「稲生物怪録」への親近感を示して来たとはいえ、本格的にソレに取り組み機会が与えられたと聞いた時は、私もキ——(‘V’)——!!!と驚喜した。しかも、天野は過去『高丘親王航海記』や『真夜中の弥次さん喜多さん』で原作ものを演劇化する作業を鮮やかに成功させてきた。そんな彼が「稲生物怪録」という古典をどう読み換え、どう黄泉還らせるのか？……それにしても、まさか糸あやつり人形芝居で天野が「稲生物怪録」をやるとは誰が予想しただろう。天野を指名したITOプロジェクトは、非常に制限であるが、同時に、大変な勇氣の持ち主でもあった。なにしろ天野は常人の既知の外部に住まう「既知外(キチガイ)」である。偏執狂的編集狂的変質者の彼の手にかかれば、単純で真直ぐな糸など、忽ち糸コンニャクみたいにグシャグシャにこんがらがらせ、訳のわからない状態にしてしまう。言わば糸の敵。ITOプロジェクトがそのことを百も承知で、意図的に糸敵を迎えたのだとしても、天野の途方もない魔術的作劇法を実際にどれほど受け入れられるのか？ 自殺行為じゃないか？ という懸念もあったはず。が、逆に、生命を賭すくらいの覚悟がなければ、真の傑作は生まれて来ないとも言える。そんな、色んな意図・糸が絡んだ結果として、稲生怪異事件から255年を経た2004年7月に初演の幕を開けた「平太郎化物日記」は、糸あやつり人形劇史上、そして演劇史上の画期的傑作となった。天野は、童話ファンタジーとしての「平太郎化物日記」を尊重し、珍しく子供にも分かるような、比較的平明な時間軸で物語の糸を紡いでみせた。それでも、天野の脳内で造形化されたシュールなまでの奇々怪々は、これでもかと噴き出して来る。しかもそこには「驚き」と「美」と「可笑しみ」と「エロティシズム」と「可愛らしさ」と「ほのほの感」と「悲さ」と「懐かしさ」がギュッと凝縮されて混在している。この舞台を、もしも彦摩呂が見たなら「知覚の宝石箱や！」と叫ぶだろう。人形を使った幻視的演劇といえばフリップ・ジャンティが有名だが、もはやそれに勝るとも劣らない。そして何よりも感動的だったのは、この芝居全体に糸愛が満ち溢れていたことだ。これほど糸にこだわった芝居も珍しい。敢えて具体的な言及は避けるが、糸あやつり人形芝居としては考えられないような場面が続出することで、かえって天野の糸に対する狂おしいほどの偏愛ぶりが垣間見えた。ITOプロジェクトも天野のとんでもない要求によく耐え、よく応えた。糸をめぐる敵対関係は、いつのまにか仲しあう関係へと転換されていた。もしも彦摩呂が見たなら「人形劇のIT革命や！」と叫ぶだろう。しかし私はこう宣言したい。「平太郎化物日記」は、演劇のITO革命や！と。(うにたもみいち)

ナレーション 知久寿焼

キャスト 飯室康一(糸あやつり人形劇団みのむし)

五味美恵子

西宮小夜子(ねぎぼうずSAYO)

ふたむらととこ(パベツンマイムシアターうさぎ小屋)

山田俊彦(人形劇団ココン)

植田八月/竹之下和美/西嶋美子

スタッフ 脚本・演出:天野天街

美術:天野天街/山田俊彦

人形製作:飯室康一/山田俊彦

人形製作協力:ふたむらととこ/植田八月

竹之下和美/山田京子/高橋大輔

永塚亜紀/北条信恵/宮前妙美

照明:小木曾千倉 音響プラン:椎名KANS

舞台監督:郡 美博 映像:濱島将裕

作曲:珠水 チラシデザイン:アマノテンガイ

制作スタッフ:ふたむらととこ/西宮小夜子

森田裕美/西嶋美子

企画・制作:ITOプロジェクト

協力 少年王者館/うにたもみいち/吉田武司

主催 下北沢演劇祭実行委員会

後援 物怪プロジェクト三次

ITOプロジェクト

アイティーオー。ローマ字で糸。「糸あやつり人形芝居」に携わる関西在住人形劇人の有志と賛同者によって2001年に結成。糸あやつりを幅広く知ってもらい、日本独自の糸あやつり技法の伝承、糸あやつりの新たな可能性を探る等を目的として活動している。

天野天街

1982年「少年王者館」結成。演劇だけでなく、映画制作、ファッションショーの演出、ポスター制作などでも才能を発揮。映画「トワイライツ」は、ドイツオーバーハウゼン国際短編映画祭・メルボルン国際映画祭短編部門でグランプリ受賞。

ザ・スズナリ

東京都世田谷区北沢1-45-15 ☎03-3469-0511
http://www.honda-geki.com/suzunari.html

2007年

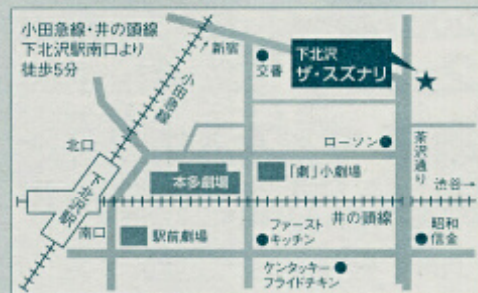
2月3日[土]

14:00

19:00

4日[日]

16:00



前売開始

11.17

●全席自由 ●入場整理券発行は開演の1時間前 ●開場は開演の30分前

入場料金: 前売 4,000円 当日 4,500円

チケット取扱 e+イープラス http://eplus.jp/ito/

ITOweb予約 http://members.aol.com/itoayaturi/

電話予約 ザ・スズナリ ☎03-3469-0511

みのむし ☎06-6423-1263 SAYO ☎072-762-0813

お問合せ うさぎ小屋 ☎072-793-9227 ココン ☎0742-49-4503